

## IV 資料紹介

### 梶原寺跡出土の羽子板

宮 崎 康 雄

梶原寺跡は高槻市東部に位置する古代寺院で、出土した瓦より7世紀後半頃に創建したとされている。『摂津職解』天平勝宝9年（757）には東大寺大仏殿回廊の瓦を焼成・納品したことが記されており、周辺では大形の掘立柱建物や瓦窯跡などを検出している。寺域は畠山神社を中心にひろがるとされているものの、伽藍の位置や構成などは現在のところあきらかではない。

今回紹介する羽子板は平成9年度に調査した97-B地区で出土したものである。調査地は畠山神社の南東側に位置し、西国街道に面している。

検出遺構には近世・近代の土坑・落ち込み・柱穴などがあり、少量の土器類や近世瓦などが出土したほか、磨耗した瓦の小片を検出している。寺院に関わる遺構はみられなかった。

落ち込み1は調査区の大半をしめる。幅9m以上、深さ0.6mをはかり、底は平坦となっていた。埋土は3層確認でき、上層から順に青灰色砂（0.1m）、暗青灰色砂質土（0.4m）、暗灰色砂礫（0.1m）である。遺物はすべて中層の暗青灰色砂質土から出土した。

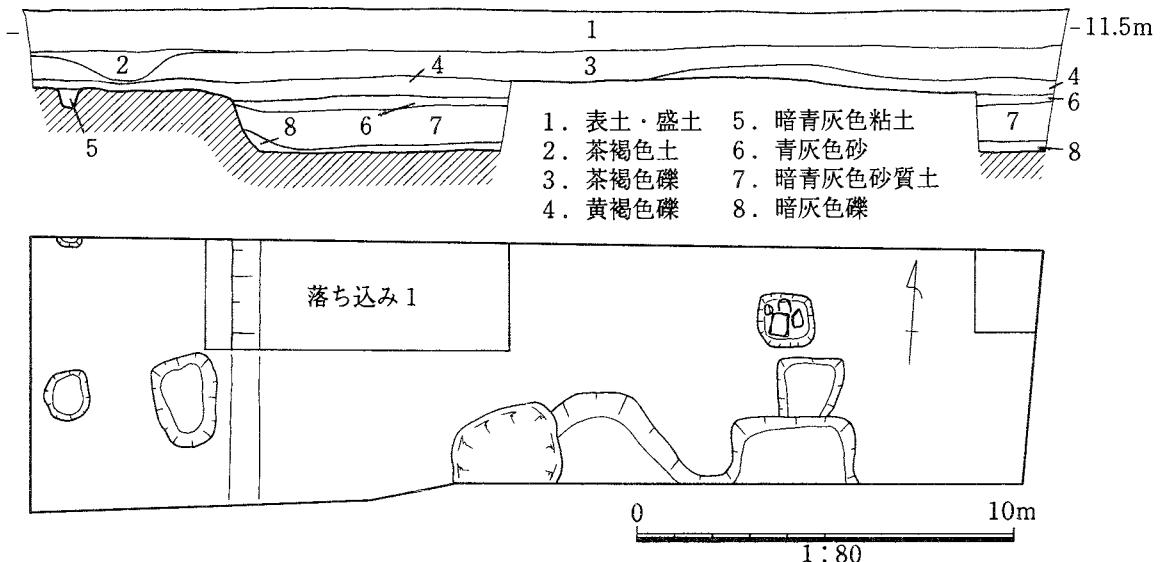


図1 梶原寺跡(97-B地区) 平面図・土層図

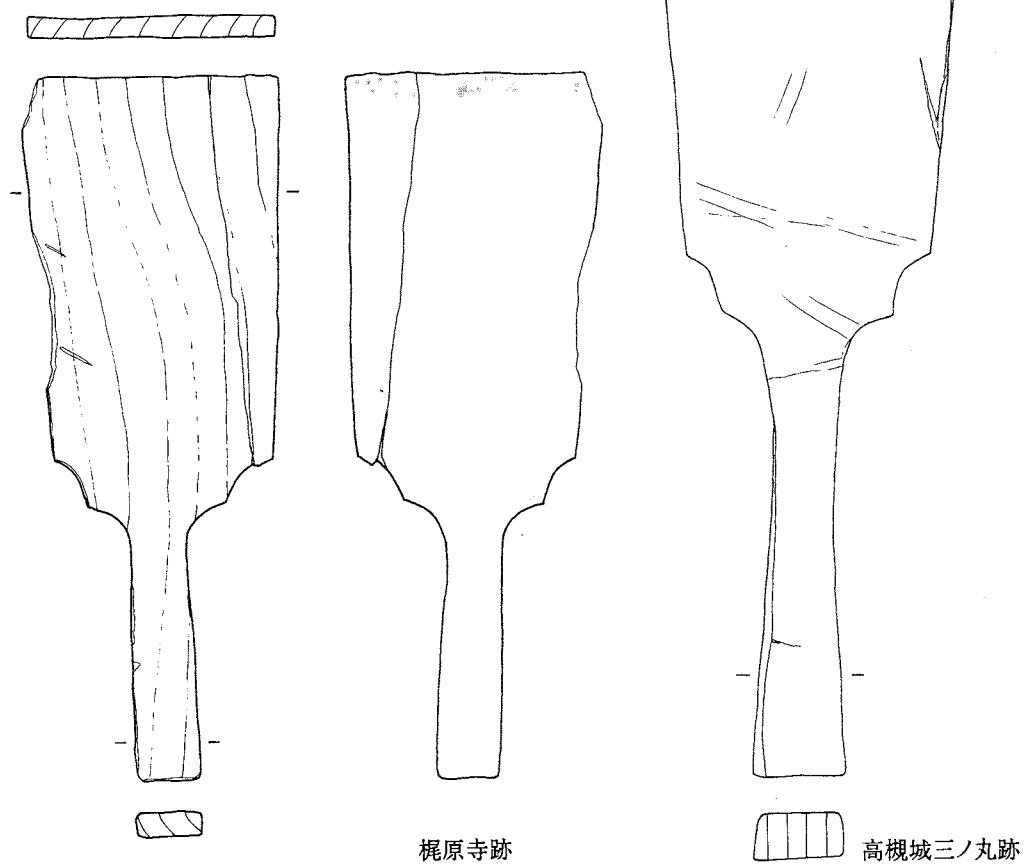
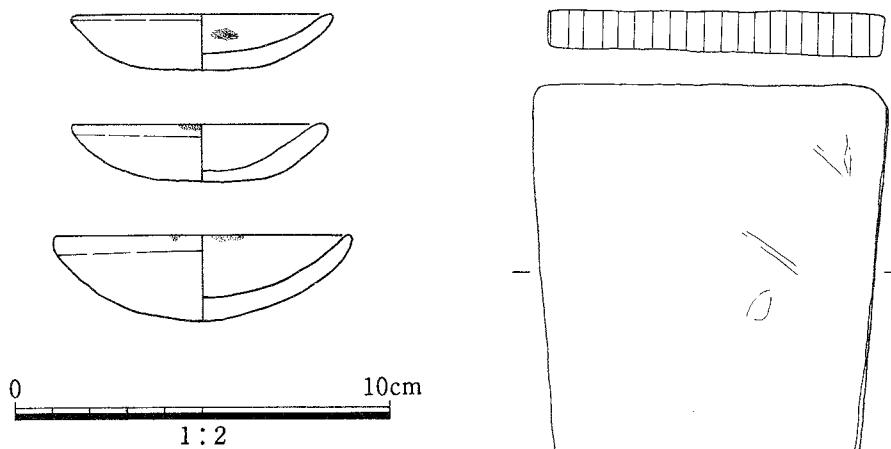


図2 出土遺物実測図

羽子板は調査区北西端、中層の最下位より出土し、土師器小皿3点、牛歯片が伴出している。

羽子板は杉もしくは檜とみられる針葉樹の薄板を加工したものである。

板部は上端がわずかに開き、基部側は二段の弧状に切り欠く二手切りとなっている。両面とも磨耗はなく、加工時の鋸引きの痕跡をわずかにとどめる。片側の面の上下には横方向に連なるように朱が遺存することから、もとは幅約5mmの朱線が引かれていたようである。朱線の間についての施朱・施文については判然とせず、すでに剥落したのかは不明である。

柄は中軸が上端面に対して直交せず、わずかに角度をもって直線的にのびる。幅は下端にむかってわずかに広くなるが、厚みは変化しない。側縁はいずれも加工したままの状態で二次的に面取りを施した痕跡はなく、磨滅もしていない。法量は全長18.5cm、厚さ0.6cm、幅6.8cm、柄幅1.8cmをはかる。

伴出した土師器小皿は3点あり、いずれも粗製品である。焼成は良く、硬質である。すべて口縁端部もしくは口縁部内面の上端付近に煤が付着することから、灯明皿として使用されたのであろう。17世紀以降と考えられるものの、詳細な時期は明らかでない。

本市では高槻城三ノ丸跡で羽子板の出土例がある。本例とおなじ二手切りで成形し、全長は32.6cmをはかる。両面とも加工痕をとどめており、羽根突き等に使用した痕跡はない。時期は近世から近代にかけてとみられている。

羽子板は本来魔除けに用いられたもので、遊戯としての羽根つきも厄除けの意味合いがつよい。羽子板の出土例が多い広島県草戸千軒遺跡では使用痕をとどめた羽子板やムクロジの種子を用いた羽が報告されているが、大部分は1点のみの出土である。

本例は遊戯に不向きな小形品であることや灯明皿・牛歯と伴出している点から祭祀に用いられたとみられ、江戸時代における羽子板の使用法を示す好例となろう。